

## 令和 5 (2023) 年度事業評価について (2023 年 4 月から 2024 年 3 月)

1. 令和 5 (2023) 年度の外部評価員による事業評価は、次の通りであった。

### (1) 外部評価員 5 名 (敬称略)

小川 智紀	STスポット横浜 理事長
菊地 麻維 (※)	日本芸能実演家団体協議会 実演芸術振興部
並木さとみ	相模原市緑区役所地域振興課 課長
吉本 光宏	文化コモンズ研究所 代表
ヲザキ浩実	玉川大学芸術学部演劇・舞踊学科 教授

なお、肩書は令和 6 (2024) 年 3 月現在のもの

(※) 菊地氏は令和 6 (2024) 年 6 月 30 日をもって退任

### (2) 評価方法

- 主催事業を外部評価員が実地見学を実施し、事業評価シート (個票) に個別事業の評価を記述。
- 年度を通した総合的な評価として、個別事業評価等を参考に事業評価シート (総合) に評価を記述。その書面評価に加えて、外部評価員と職員とが出席する「事業評価会議」を開催し、意見交換や議論の上、当該年度の実業評価を総括する。

### (3) 評価結果 (概略)

- 個別事業評価数 (カッコ内は、令和 4 (2022) 年度)

県民ホール	10 事業 12 シート (12 事業 19 シート)
芸術劇場	11 事業 22 シート (14 事業 26 シート)
音楽堂	8 事業 9 シート (6 事業 8 シート)
計 (延べ)	29 事業 43 シート (32 事業 53 シート)

○事業評価会議

令和6(2024)年10月3日(木)

出席評価員 4名出席

出席財団職員 副理事長兼音楽堂館長、専務理事、事務局長、事務局次長兼経営企画課長、県民ホール・芸術劇場総支配人、県民ホール支配人、芸術劇場支配人兼事業部長、県民ホール・音楽堂事業部長、芸術劇場副支配人、音楽堂副館長、経営企画担当部長兼総務課長、社会連携ポータル課長、担当職員(オンライン出席)、事務局

(4) 評価結果(外部評価概要)

1. 芸術文化事業

県民ホール	個別の目標や施策	<ul style="list-style-type: none"><li>・一柳慧芸術総監督と沼野雄司芸術参与の方針のもと、上質でバラエティ豊かな事業を展開していく。</li><li>・具体的には、令和7年1月に迎える開館50周年に向けて、令和5年度と令和6年度の2年がかりで新しい総合芸術表現を追求・創作するオペラ作品の新制作に取り組むほか、大ホール2,400席の大空間と舞台機構を生かした舞踊やオーケストラ公演の実施、企画性の高い公演による小ホールの活性化、オルガン・アドバイザーの監修のもと実施する多彩なオルガン・コンサート、現代美術の企画展や県民参加の美術展によるギャラリーの活用、県域でのアウトリーチ型公演の実施などを通じて、県民ホールの価値を高める事業を行う。</li><li>・事業実施においては、新型コロナウイルス感染症の拡大防止に対応するため、観客・出演者等の安全・安心を確保するとともに、コロナ後の芸術文化のあり方を考えていく。</li></ul>
<p>○大ホールと小ホールをうまく運用し、特色のある事業展開を行っていたと評価できる。特に小ホールでの現代音楽とクラシック音楽やバレエなどを組み合わせた演目、レクチャー付きコンサート等、メインターゲット以外の観客層へリーチしようとする演目など意欲的な取組が印象的であった。</p> <p>○「リヴァイザー」は県民ホールの存在価値を象徴するような公演となった。首都圏では数少ない2400名のキャパシティを持つ大ホールで、地域の他団体と連携し、大型海外演目の招聘公演を成功に導いたことは舞台芸術業界にとっても良い事例となったと評価できる。</p> <p>○オープンシアターは、子どもにとって本物を観るチャンスと、参加型のイベントも利用できることで楽しみが倍増し、大人と子どもと一緒に喜べるものとなっており、3世代で来場されている方も多いうように感じられた。地元の方も多く、地域の文化に対して県民ホールが大きな役割を果たしていると評価できる。</p> <p>○オープンシアターでの社会包摂的活動や県内巡回オペラなど、広く県民に舞台芸術に触れてもらおうとする活動は、会場や客席の反応も良く、休館になっても何らかの形で継続することが期待される。</p>		

<p>芸術劇場</p>	<p>個別の目標や施策</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・芸術監督・長塚圭史のもと、年間を通じたプログラムや劇場広報を通じて、高い芸術性を担保しながら、専門人材、劇場設備・機構、劇場間ネットワーク等のリソースを活用し、それらを積極的に育成・展開・活用する企画を立て、安定した事業運営を目指す。</li> <li>・前年度に引き続き、劇場・財団のミッションを踏まえた多様なプログラムを提供する枠組みとして、4月～8月を「プレシーズン」、9月～3月を「メインシーズン」として2つに分け、活動にリズム感を持たせ、より県民に親しまれる劇場を目指す。</li> <li>・4月～8月の「プレシーズン」は、ひらかれた劇場として県民の方々とつながることを目指し、舞台に触れることの少ない方々に、劇場の存在を知っていただき、また観客となる体験を提供することを主眼として企画していく。</li> <li>・9月～3月の「メインシーズン」には、毎年度テーマを掲げ、時代や劇場の動性を表現しながら、芸術監督演出作品をはじめ、そのテーマから想起される多彩な作品をプログラムする。</li> <li>・令和5年度は、『貌～かたち～』をシーズンタイトルとして、多様な価値観、美意識、そして舞台芸術の喜びを県民に提供していく。</li> </ul>
<p>○全般に一定以上のクオリティーを保った演目が並び、芸術監督のカラーが定着してきたことが実感できるようなラインナップとなっていた。特に芸術監督が、これまであまり舞台に親しんでこなかった県民に接点を広く持ってもらうと心を砕いていると推測出来る。他方、一つ一つの演目が縮小し、これまでKAATが劇場シーンを牽引してきたラインナップの発信力・波及力が弱まっている印象は否めない。一つ一つの演目の役割とミッションを明確にし、ラインナップにメリハリを持たせることを検討されたい。</p> <p>○プレシーズン、メインシーズンと、様々な年齢層に注目されるキャスティングができていたと評価できる。また、KAATを離れた巡回公演は、演劇ファン以外の県民に観劇の機会を提供することにより、新たな集客力の向上にもつながったのではないだろうか。KAATの認知度を上げるためにも今後の継続が望まれる。</p> <p>○大スタジオでの公演では、会場に入った時のインパクトが強く、客席と舞台が一体であったことが印象的であった。公演の度に色々な発見があり、毎回同じ会場とは思えず、会場の使い方が効果的であると感じられた。</p> <p>○「アメリカの時計」の日本初演、「虹む街の果て」での県民参加、「外地の三姉妹」の再演、「JAZZ 大名」の国内ツアーなど、KAATならではの取組で舞台成果を上げていることは高く評価したい。</p>		
<p>音楽堂</p>	<p>個別の目標や施策</p>	<p>音楽堂のプレゼンスを高める事業を継続して実施する。上質性、先進性、国際性とオリジナリティにあふれたクラシック音楽を主としたレギュラーラインナップを主共催連動して展開し、若い世代や地域に向け、新しいジャンルの音楽や他ジャンルの芸術との協働も含めた発信を行い、一流室内楽ホールとしてのブランドイメージを構築する。</p>

<p>○常に正当なクラシックホールのイメージがある音楽堂であるが、財団のミッションを果たすべく、様々な新しい試みを多く行っていることは注目に値する。</p> <p>○「新しい視点」はいずれも新規性に富んだ意欲的な取組で興味深く、今後の展開と定着が期待できる、音楽堂の先駆性を証明する取組と評価できる。</p> <p>○「せかいはともだち」では、横浜に多く在住している外国人も家族で参加している様子が見られたほか、ロビーやホールの外でもイベントを行っており、まさしく異文化交流の場となっていたと評価できる。他の公立文化施設事業で類を見ない5か国語対応で地域のあらゆる人を取り残さないという姿勢が見て取れた。今後の来場者増と事業継続に向けて積極的な取組が望まれる。</p> <p>○先生のためのアウトリーチは、縦割り行政で他の自治体では連携を取ることが難しい教育委員会との連携により、文字通り「先生たちのかゆいところに手が届く」取組ということが、参加した教師の意見や質疑応答で読み取れた。さらに広く展開することにより、先生たちがその手法を習得すれば、多くの子どもたちが舞台芸術に触れることができ、今後の観客、ひいては舞台芸術の人材育成につながるのではないかと。</p>
--

## 2. 施設維持管理運営事業

<p>県民ホール</p>	<p>個別の目標や施策</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・首都圏有数の客席数を持つ大型文化施設として、どのような催しにも対応できるよう、また、年齢、性別、国籍、障がいなどにかかわらず、あらゆる人々が芸術文化に親しみ、様々な芸術文化活動に携われる、魅力的で快適な場となるよう、安定したサービスと技術的サポートを提供する。</li> <li>・自主事業と貸館事業の適切なバランスを図り、新型コロナウイルス感染症拡大前の稼働率に回復させることで、利用料収入の確保を目指す。</li> <li>・神奈川県内文化施設の施設利用担当者を対象とする、専門性の高い人材育成講座を実施し、県内文化施設全体のレベルアップ、県民利用のサービス向上に寄与する。</li> <li>・県と連携をとりながら、老朽化した施設の適切な維持管理を行うとともに、バリアフリー・ユニバーサルデザイン化など、県民サービスの観点から時代に即した施設整備を行っていく。</li> <li>・周辺施設の需要の変化に対応しながら、日々、多くの県民が集う活気あるホール環境を維持する。</li> <li>・県と連携をとりながら、老朽化した施設の適切な維持管理を行うとともに、バリアフリー・ユニバーサルデザイン化など、県民サービスの観点から時代に即した施設整備を行っていく。</li> <li>・抽選会後の空き日は地元イベントなど等に対し、積極的に営業活動を行い利用の促進を図る。</li> <li>・法令を遵守し、全ての利用者に公平公正で安全第一かつ安心感を提供できる運営を行う。</li> </ul>
--------------	-----------------	---

	<p>○老朽化による設備の障害については、やむを得ないことだが、表面上は古さを感じられず神奈川県を代表するホールという威厳がある。利用率も高く、館としての運営努力が感じられる。設備の劣化によるトラブル等が想定される中、施設スタッフはよく対応を行っており、また WEB 予約システムやキャッシュレス決済など、利用者の利便性のために可能性を追求して、出来ることは実行していく姿勢は評価できる。</p> <p>○来館時にエントランスの混雑を感じることもある。大ホールと小ホールのお客様の導線が交わり、煩雑さを感じる場面があり、その大きさ故に致し方ないところはあるが、今後の課題のひとつとしてほしい。</p> <p>○主催事業（オープンシアター）において、会場案内スタッフに当日のスケジュールについて確認したところ、周知が行き届いてないような場面が見受けられた。並行して各種の事業を行うのは人手の確保の面からも難しいことと思われるが、経験を元により改善されていくことが望まれる。</p> <p>○県民ホールは主催・共催公演や貸し館事業を合わせると海外の一流オペラハウス、バレエ団、コンテンポラリー舞踊団がラインナップを並べる首都圏では唯一のホールであり、国内のエンターテインメント業界でも 2000 名強のキャパシティを持つホールが求められている今、その休館は舞台芸術界では大きな損失と言える。一日も早い再開、そのための方針の決定が望まれる。</p>
<p>芸術劇場</p>	<p>個別の目標や施策</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・開館から 12 年がたち、ミュージカルのロングラン公演の会場として、多彩な演劇公演が上演される劇場として横浜に定着してきた。認知度の向上とともに比較的長期の利用が安定的に入ることになっていることから、引き続き専門劇場として運営・技術サービスを安定的に提供していく。</li> <li>・会場案内、舞台技術、警備等の各委託会社と協力し、館全体で、劇場の安全と危機管理体制を整え、快適な劇場空間の維持と利用者サービスの向上に努める。</li> <li>・電子部品等の更新時期を迎えていることから、県と連携をとりながら適切な更新工事等を実施していく。</li> <li>・外国人・障がい者等の来館者対応として、鑑賞サポートの充実、ホームページの改善、職員研修などを順次計画的にハードとソフトの両面から進めていく。</li> </ul>
	<p>○劇団四季のロングラン公演による県民の鑑賞機会の提供は、KAAT の認知度の向上やまちの賑わいの創出の一翼を担っており、劇場の宣伝効果も持たせるという狙いは功を奏していると言える。演劇に特化した劇場は県内でも珍しく、その上で高い利用率、利用料収入を保っているのは、ハード・ソフト両面の自助努力の賜物と評価できる。</p> <p>○他方、主催事業が大・中スタジオに集中し事業の発信力、劇場としてのブランド力に影響が出るのではないかという懸念もあり、バランスのとれた運営が求められる。</p> <p>○パブリックスペースを利用した飲食利用など「ひらかれた劇場」のイメージを定着させており、次回、来館時のチケット購入に繋がる取組となっている。チケット販売にも工夫がみられ、特にシーズンチケットは、図らずも自分の好きなジャンルから、多少離れた作品に触れることが出来る良い手段となっている。</p> <p>○アクリルパーティションのアップサイクルをやったこと等、環境に配慮した劇場運営にチャレンジしていることは重要である。シアター・グリーン・ブックを最初に紹介</p>

	<p>したのも KAAT と思われるが、国内ではあまり進んでいない取組を KAAT が率先してやっていることは高く評価できる。今後も環境に対する取組を推進してほしい。</p> <p>○シーズンチケット（ラインアップ発表会への招待含む）や県民割などの細やかながらも様々な創意工夫で常に創客を目指すことや、ハラスメント対策やシアター・グリーン・ブックへの取組など、全国の公立劇場に先駆けて劇場や創作環境が抱える今日的な課題へ積極的に向き合い提議する先駆的な姿勢こそが KAAT が期待されている姿であるので、今後とも挑戦する姿勢を維持していくことが望まれる。</p>
音楽堂	<p>個別の目標や施策</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・令和3年8月に音楽堂は、併設する県立図書館・前川國男館と共に、神奈川県指定重要文化財（建造物）に指定された。建物の価値が向上したことにより、定期的で開催している前川建築見学ツアーが人気度を上げていること等から、建造物としての価値とコンサートホールとしての価値をさらに向上させていくことを基本方針とし、安全・安心な施設維持管理、魅力ある事業実施や人材育成に取り組む。</li> <li>・利用対応については、利用者が安心感を持って利用できるよう親切丁寧な対応、社会情勢等に応じて変化していくコロナ禍対応も安全・安心に利用いただけるように周知を行い、利用者・来館者の満足度向上を図る。</li> <li>・老朽化が顕著な施設及び設備維持管理については、定期点検・保守を継続して行い、事故や危険の未然防止を徹底させ、経年劣化に対する県有財産の価値保全のための適切な管理に取り組む。引き続き設置者と相談、調整の上、長期修繕計画を実行していく。</li> <li>・建築見学ツアーについては、引き続きボランティアグループ bridge と連携し定期的を実施する。昨年度トライアルで開始した障がい者を対象とした見学ツアーを引き続き継続し、ブラッシュアップを図る。</li> <li>・紅葉ヶ丘地区の活性化のため、県立図書館、青少年センター、横浜能楽堂、横浜市民ギャラリーとの5館連携事業「まいらん」を引き続き促進させる。</li> </ul> <p>○「紅葉ヶ丘の広場の活用」や「前川建築の見学ツアー」などホールの魅力発信のために本来の公演とは異種の事業を積極的に行い、新たな観客確保に繋げようとする姿勢が窺える。特に建築見学ツアーは、ボランティアグループと協働した有意義な取組であると評価できる。青少年センター、図書館とあわせて、紅葉坂エリア全体でアピールするようなことができるとよいのではないかと。</p> <p>○建物は県の指定重要文化財（建造物）に指定されていることもあり、施設維持管理運営業務には他にない苦勞や注意を払わねばならず、お客様の安全確保に努めるのはかなり神経を使う作業ではないかと考えられる。外見上は古さを感じさせないが、躯体などの老朽化は目には見えないところでもあるので保守管理は今後も計画的にかつ迅速に対応することが求められる。</p> <p>○建築費の高騰で将来の修繕費の確保が困難を極めていることは、全国の公立ホールの共通の課題であるが、その価値を活かして撮影協力で収入を得る一方、小口の寄付を募るファンディングを試みるなど様々な努力を重ねていることは評価できる。県と</p>

<p>協力して寄付をふるさと納税とする等、さらなる取組も考えられるのではないか。</p> <p>○事業開催時のシャトルバスの存在がまだあまり知られていないと見受けられる。シャトルバスの広報を強化すると、特に暑さが厳しい夏季はより多くのお客様が安心して足を運んでいただけるのではないか。</p>
--

### 3. 社会連携ポータル部門

社会連携ポータル部門	<p>個別の目標や施策</p> <p>①専門人材育成プログラム、②学校教育へのアプローチ（エデュケーションアプローチ）③あらゆる人々が芸術文化に親しめることを目指すインクルーシブアプローチ、④地域との連携を強化する機能（県域ネットワークプログラム）の4つの柱を中心に、3館の特性を生かしながら、社会と芸術をつなぐ窓口としての機能していく事業を展開していく。</p>
	<p>①専門人材育成プログラム</p> <p>○舞台芸術・劇場運営の育成プログラムで実施された事業の一つ、県民ホールの劇場運営マネージメント講座では、視覚障害のイメージから外れる人たちの困難を起点に文字デザインで課題解決を図る活動の紹介が行われたことは、劇場運営の視点を広げる実践的かつ意欲的な企画であったと評価できる。</p> <p>○KAATの舞台技術講座では、伊藤熹朔賞特別賞を受賞した舞台美術家の講演のほか、高所作業の際に必要な労働安全衛生法に基づく特別教育に関係する講習など、専門性を習得するために必要な充実した企画であったと評価できる。</p> <p>○インターンシッププログラムでは、管理している三館が連携した取組はなかったものの、各館が打ち出している、市民参加色の高い企画や、芸術監督が作・演出を担当した主催事業、実験色の強い新シリーズといった独自色のある企画でのインターンシップ受入を行うことができた。定員を超える応募がある状況で、舞台芸術関係への就労を希望する学生や若い方たちの、3施設に対する注目度が高いことがわかる。</p> <p>○教育機関と連携した育成プログラムでは、東京音楽大学、玉川大学、名古屋芸術大学、政策研究大学院大学、昭和音楽大学など、芸術文化の人材を多く輩出している高等教育機関とのパートナーシップの維持・強化ができた。</p> <p>○「芸術文化の人材育成のあり方」の課題を当財団のみで引き受けることは現実的には難しい。同種の芸術文化事業を行う他の組織とも課題共有し、現代社会におけるアートを牽引する役割を期待したい。「次世代への継承」については、従来の「作り手」「受け手」という区分に収まらない層、たとえばボランティアやインターンシップ、サポーターなどを広範に捉えシステムづくりに挑んでほしい。</p> <p>②学校教育へのアプローチ</p> <p>○神奈川総合高校舞台芸術科では、校外学習や夏季集中講座枠での対応であったが、県の「かながわパフォーミングアーツアワード 2024」での22世紀飛翔枠選抜大会（県内高校生選抜大会）ともあわせ、学校との連携の好循環に繋がったものと評価できる。</p> <p>○音楽堂の「先生のためのアウトリーチ」では、愛川町、海老名市、藤沢市といった、管理施設から離れた地域での学校教育活動に直接的に関与できたことは大きな成果であった。これらは財団の認知度の向上にもつながるため、今後も継続して行っていただきたい。近隣の中学校の職場体験引き受けも、地域の文化施設として意義のある活</p>

動だったと考える。

- 「未来につなぐ」ミッションを持ち、県域をカバーしながら「創造性やコミュニケーション力を養う教育の拠点」を目指す事業の今後として、市町村の教育委員会や教育事務所などと連携し、広域の教育行政の中で存在感をより発揮してほしい。

### ③あらゆる人々が芸術文化に親しめることを目指すインクルーシブアプローチ

- 改正障害者差別解消法に基づき、令和6年度から事業者の合理的配慮の提供の義務化がなされるのを前に、管理施設において、聴覚障害者、視覚障害者向けのサポートのほか、多言語での鑑賞サポートなど、具体的な支援のバリエーションが出てきていることは、社会連携ポータル部門の大きな成果である。開演前の事前説明会、台本事前貸出、白黒反転版曲目リスト、タブレット型端末による字幕提供などは複数施設での取組となっており、試行錯誤を重ねながら必要な取組が拡大していることは評価できる。単純な支援策を踏み出しインクルーシブな取組を推しすすめた、県立音楽堂での「建築を触れて楽しむことができるツアー」は画期的である。

- 鑑賞サポートは、メニューも多く、様々な事業で実施されており、今まで、あまりホールに足を運ばなかった方々が舞台芸術の鑑賞機会を得て、気兼ねすることなく公演を楽しむことが出来る効果的な取組と評価できる。

- 民間企業の寄付により、鑑賞機会の少ない子どもたちに向けた招待枠を設けたことも、意義深いことであった。文化芸術基本法には「経済的な状況」「居住する地域」にかかわらず芸術文化環境の整備を求めており、それに沿った活動であるといえる。

- ミッションの一つである「感動を分かち合う」の実現に向けて、施設間連携の強化が求められる。また、これまでの取組は施設来館を前提とする支援という方針が暗黙裡にあるが、施設への来館のハードルが高い層へのアプローチも求められる。たとえば障害種別でいえば、知的障害、発達障害、精神障害のある人への、移動支援を含めたプログラム開発の余地はないだろうか。子どもたちの「体験格差」が焦点化している今日、生活困窮世帯に向けての格差是正を含めた文化的な取組にはどのようなものが考えられるか。現場知からの新たなチャレンジを期待する。

### ④地域との連携（県域ネットワーク）

- 小田原、寒川、茅ヶ崎、座間、鎌倉、逗子、川崎といった全県をほぼカバーする圏域での巡回公演を継続する中で、必要な市町村等とのネットワークの維持・拡大ができたことは評価できる。

### ⑤その他

- 課題意識はありつつも日常業務に忙殺されるホール職員と伴走する、教育普及や人材育成、地域連携、多文化共生、社会的包摂など多様な社会課題に取り組む専門部署を設置したことで、事業としての質向上と取組数が増えることが期待される。

- 芸術文化に関わる人、団体、場所などとネットワークを築くための窓口を目指す社会連携ポータル部門は着実に取組を広げている。県の委託事業である共生共創事業では、事業実施のみならず、神奈川県内の文化事業に対する助言も積極的に行っており、その成果もこうした流れを後押ししたのだと考えられる。事業開発や調査研究を積極的に続け、トライ・アンド・エラーを重ねて欲しい。



#### 4. 本部事業

芸術文化に関する情報の収集提供	個別の目標や施策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・当財団の主催事業のみならず、広く県内外で実施された芸術文化や文化施設の取組等を紹介することで、県民に芸術文化への理解をより深めて親しみを感じてもらおう情報誌として「神奈川芸術プレス」を年2回（9月、3月（予定））発行する。</li> <li>・公演・催物に関わるだけでなく、文化と社会の架け橋になるような特集テーマを設定し、人材育成・インクルーシブ関連の取組など様々な観点から、紙の冊子ならではの読み応えのある記事を掲載していく。また、ウェブ版も作成し、読者の拡大に努める。</li> </ul>
	<p>○神奈川芸術プレスは毎回さまざま切り口で情報収集されており、興味深い。芸術分野の知恵袋的な情報紙として面白いといえる。紙媒体は県内の色々な箇所に配架しており、手に入れやすいのも利点のひとつであり、評価できる。</p>	
チケットかながわ、かながわメンバーズの運営	個別の目標や施策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・会費無料のインターネット会員制度「かながわメンバーズ（愛称 Kame: カメ）」を運営し、会員のニーズに合わせて形態や配信時間を模索し、メールマガジンの発行による公演案内やチケット発売情報の提供、先行予約の実施などのサービスを行う。会員情報を適切に管理し、情報の安全性を確保し、効率的な運営を行う。</li> </ul>
	<p>○個人情報の取り扱いおよび Getii のデータ分析機能を導入したことは評価できる。導入しての経過や現状等をしっかりと分析して、今後にいかしていくことが求められる。</p> <p>○チケット販売従事者は、自己研鑽に頼ると業務の加重負担に繋がる懸念もあり、契約形態に応じた、バランスの取れた従事者研修の実施に努めてほしい。</p>	
資金調達活動	個別の目標や施策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・資金調達活動として、文化庁等からの補助金・助成金の確保に積極的に努める。</li> <li>・賛助会員制度（寄付金）の新規会員獲得のため、法人、個人の方々に向け方策を実施する。</li> <li>・インターネットを活用した寄付の受け入れを推進し拡大を図る。</li> <li>・個別協賛金や、広告出稿等の幅広い支援を働きかける</li> </ul>
	<p>○文化庁の助成金の採択やその他補助金など財源の確保に尽力していることが窺える。常に前衛的であり、実験的な部分を持ちつつ、助成金のみで事業を行うのは不可能な故、大衆的な集客目的事業も念頭に置いて事業を進めていかなければならない。令和5年度の事業については、そのバランスが程よく感じられ、出演アーティストや公演内容などは多方面から楽しめ、納得できる事業展開であったと評価できる。</p> <p>○寄付金制度による収入の確保に努めていることは評価できる。先の評価でもあがったが、個人寄付について、ふるさと納税を活用し、文化事業や文化施設の運営に使っていく仕組みを検討することも有効である。</p>	

## 5. 令和5(2023)年度重点テーマ

### 「芸術文化事業の達成度(第4期指定管理提案への対応)」について

第4期指定管理期間における芸術文化事業が、ここまでの3年間の中でどの程度達成されたかを各館ごとに中間評価し、それを踏まえた上で、外部評価員から今後の財団の芸術文化事業についての講評(助言、アドバイス)を得た。

- 施設がきれいであり、行って心地がいい空間、非日常的な空間を提供することが、芸術文化事業のひとつの目標と言えるが、現時点ではそれが達成できていると評価する。今後も劇場内での公演だけでなく、巡回公演を積極的に行うことにより、知名度が上がり、認知度も高まっていくのではないかと考える。特にKAATについては、比較的新しい劇場ということもあり、まだKAATを知らない方もいると考えられるが、今後も県下の施設や市町村と協力して、全県民に認知される劇場になることが期待されている。
- 4つのミッション、「創造に挑む」「感動を分かち合う」「つねに考える」「未来につなぐ」の構造がよくできていると評価する。特に「つねに考える」は社会連携ポータルのもも意識しているミッションと考えられるが、この取組を、大きなミッションを掲げてやっていることは意義がある。
- 4つのミッションは、具体的にイメージすることが難しかったが、3館の芸術文化事業を年間通して視察し、事業評価会議において自己評価シートを見て、腹落ちした。芸術文化事業の現場をやっていると、劇場スタッフや職員は常に走って過ごすような生き方になってしまう。その中において、考えながら走り、何か気付きを覚えて、そこで少しでも改善点を見つけてトライする時間はなかなか取れないが、あえてミッションを掲げて目標を課すことは、非常に重要と考えられる。これらを財団が実際に実践していることが見て取れたので、とても意義のあることだと感じられた。
- 事業評価において、各部署が目標に沿って達成度を記述しているが、どういう成果を達成したかを確認する際、それを言語化していくことはとても重要である。財団内部でこのように達成度を検証し、自己評価として記述していくことは、劇場運営の地盤を支えることにつながるのではないかと考える。
- 県民ホールやKAATの県内巡回公演、音楽堂のアウトリーチ等、市区町村レベルで取り組むことの多い事業を、県レベルで頑張り、くまなく届けるという取組は、すぐに成果が出るものではない。それに成果を信じて取り組んでいるというのは、神奈川の大きな特長だと感じており、県の文化政策的にも意義深いものであると評価できる。
- 県の施策や文化政策の中で、財団が担っている部分は非常に多い。それを考えると、財団がやっていることは、県の政策上においても非常に意味があることだと、説明できる回路を作る必要があるのではないかと考える。アーツカウンシルとまではいかなくとも、単に指定管理施設を運営している以上の重要な事業を財団が行っているということを、県にもきちんと伝えていく回路、政策提言ができる場があるとよいのではないかと考える。